

# 就学前の子どものための指導計画と評価

## A guidance plan and valuation for preschool children

松田 智子  
Tomoko Matsuda

### I. はじめに

保育所保育指針（以下、保育指針）は、平成20年の告示化により、国の正式な文書となり、平成29年に9年ぶりに改訂された。保育指針には、保育のとは何かとその意味するところと、保育で大切にしなければならないことについて基本方針が述べられている。つまり、保育所に入所している子どもたちが、心身ともに健全に育成されるために、日々の保育に求められることを記したものである。児童福祉法の基本理念のもとに、保育内容の根本的な枠組みや方向性を示している、ガイドラインとして位置づけられている。幼稚園教育要領（以下、教育要領）と異なるところは、その保育対象が産休明けの0歳児から5歳までの幅広い子どもであり、それにより保育対象の発達の幅が大きいということである。さらに、幼稚園と比較して保育所は在園時間が長いため、保育内容は教育だけではなく、家庭療育の補完を行うことも、その狙いとして定められている。

### II. 保育所保育指針の改訂のポイント

今回の改訂では「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の3つの法令が同時に改訂された。3つの法令の同時改定は、かつてなかったことであり重要に受け止めたい。つまり3つの就学前施設が、日本の幼児教育施設として初めて公に認知された証であると筆者は考えたい。それと同時に乳児保育から幼児教育への連続性や、公立市立を問わず日本のすべての幼児教育施設が、就学前までの教育の内容や質を向上させ整えていくことが、国家的に義務であると方向性を示されたといえる。幼児の発達の早期化に合わせて、世界的な潮流である5歳児教育の義務化の方向に、日本も舵を切っているようである。

今回の改訂においては、幼児教育（環境を通して行う教育）とは何かを根底にして保育を見直すこと、「資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識して計画や評価を行うことが重視されている。さらに保育指針では「乳児・1歳以上3歳未満児の保育」を理解し、乳児期の保育や子どもの育ちを把握し、3歳以降の幼児期への連続性を図ることが一層重視されてきている。

平成20年の改訂では、保育指針は告示化のために大綱化し、13章あった項目が7章に絞り込まれた。その際に保育のねらい及び内容は、教育要領の5領域の説明が保育所にも導入され、原則としてその方向性を採用して対応することになった。その結果、長所としては幼稚園と同様に5領域により、保育所の保育内容も細かくその価値が吟味されるようになった。しかし短所としては3・4・5歳児を念頭に作成された5領域の考え方を、1・2歳児の乳児保育の目標や評価にそのまま当てはめることになり、乳児の具体的な育ちと合わないという課題が出てきた。そこで、今回の改訂では、その短所を解決するために、1歳以上3歳未満児の乳児保育のねらいや内容が、別に示されることになった。このことについて、筆者は大いに歓迎するものである。

### Ⅲ. 保育所の計画と評価の意義

保育所の保育を進めるうえでその基盤になるのは、保育指針に基づいた保育計画の作成である。保育計画は、産休明けから就学前までの期間の長期にわたり、子どもが人間として成長するための望ましい生活を考えて、その心身の発達に応じて保育の目標と内容を配列したものである。

筆者が知る、公立のS保育所では、保育目標を次のように掲げていた。

- ・心も体も元気な子ども
- ・自分でできることは進んで取り組もうとする子ども
- ・自分の気持ちを素直に表現できる子ども
- ・色々なことに興味を持ち挑戦して遊べる子ども
- ・相手の気持ちを考えて、仲良く遊ぼうとする子ども

上記のような目標を達成するために、どのような保育すべきかを考えて、子どもの成長、生活の流れ、在園時間、年、期などを見通していくつかに区切り、組み合わせて保育計画は作られていた。つまり保育計画は、幼稚園の教育課程と同じ意味を持っているといえる。そのため、毎年大きく変化するものではないが、年度末に評価をして若干の見直しをする必要はあるだろう。

しかし、激しく変わる社会状況に伴い、乳幼児施設の在り方が大きく変動する今日においては、保育の状況が大きく変化する場合があります。例えば公立保育所と公立幼稚園が合併され、新たな公立こども園となったり、公立の保育所が民営化され経営者が変わったり、そのため保育方針が大きく変化する場合があります。また女性の社会進出による社会的な要請から、保育時間の延長や特別保育の導入などが行われた場合は、それらの状況に対応して、保育所の基本方針を変更する必要がでてくる。

つまり、保育所の保育計画と評価は、従来の幼稚園の「保育課程」と言われるものに相当し、保育所の目的や育てたい子ども像に基づいて、園の生活全体をとおして総合的に展開されるものであるとともに、長期的な視点から作成されなければならない。作成の際には、保育所の遊びや生活の中で「どのような子どもの育ちがあるのか」を見据えて「5領域（健康・環境・人間関係・言葉・表現）」や「育みたい資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」などで示された表現を取り入れながら、保育の内容を言語化することが必要である。このことは保育所の職員間で子どもの姿を共通理解するのに役立つだけでなく、保護者や地域への保育内容の説明においても有効に活用できる。

この保育計画は作成すれば、それで終わりというわけではない。PDCAサイクルを確立し、評価を行うとともに少しずつ改善を続けることが求められる。このサイクルは、年度の初めの保育の方針や園の目標を定め、1年間という長期サイクルに渡り行われるものである。そして、次年度の目標を設定する際に、改善に活用されるものである。筆者は小さな日々の行事や日常の保育内容に置いても、このPDCAサイクルは実践されるべきだと考える。

例えばPLAN段階で「子ども達の育ちに合わせて、遊びから食事への移行がスムーズにいく」ように計画を立てると、DO段階では計画に基づいてそれに対して支援を実践することになる。その際に、実際の子どもの手洗いの様子や遊びの終了時の様子を、ビデオに撮ったり写真撮影をしたりしておくことが参考となることが多い。CHECK段階では、後日に写真やビデオを視聴しながら、子どもの様子から改善点を見つけるために、保育所の職員全体で行うのがベストである。最後のACTION段階では、改善点を取り入れて再度、保育において効果を確かめることになる。保育所では朝から夜まで長期にわたりずっと子どもが在園しているので、職員は午睡の時間などを活用し、短時間のミーティングを行わなければならない。CHECKでおこなった改善点をもとに、環境設定を工夫したり保育内容を改善したり

して、次の実践を行うことがPDCAサイクルである。このように視聴覚機器を活用すれば、短時間で効果的なPDCAの取り組みが可能である。

#### IV. 保育所では養護と教育を一体的に扱う

今回の保育指針の改訂では、第1章総則に「2 養護に関する基本的事項」が示された。総則に位置づけられたことは、養護も教育と同様に保育におけるもっとも重要な原理・原則として認知されたことになる。養護とは「生命の維持及び情緒の安定」と定義されている。つまり、養護がきちんとなされてこそ乳幼児期の教育は成り立つのである。では、具体的に養護とは何を指すのだろうか。保育所に登園する子どもは、背景にそれぞれの家庭環境があり、喜んで登園する子どももいれば、不安いっぱい登園する子もいる。それぞれ個々の状況は違えども、保育所ではすべての子どもが安心して過ごせるようにしなければいけない。つまり子どもの生活実態に寄り添い共感し、気持ちを楽しく前向きにさせて、生活できるように援助することこそが養護である。

しかし養護とは、子どもに個別に対応することだけを意味するわけではない。環境構成で「養護的な環境」「養護的な雰囲気」など、集団への対応も養護に含まれる。例えば、子どもが「ここに来ると落ち着く」と感じられる環境を作ることなども含まれる。筆者が参観したS保育所では、子どもが室内の隅の穴倉のようなところに入り込んで、遊ぶことができる小さな空間を、各年齢に合わせて設置していた。子どもはそこに入り、寝そべったりまごをしたりしながら、くつろいだ姿を見せていた。2歳児クラスでは、穴倉ばかりに押し合いながら入っていたのが、とてもおもしろく興味深く感じられた。さらに保育者自身も、大きな人的な養護的環境と考えられる。保育者が子どもに対して、「いけません。ダメ。」という禁止や「言われた通りしなさい。」「早くしなさい。」という指示の言葉ばかりでなく、穏やかで心地よい応答や共感的言葉を使うことは、子どもの心を落ち着けることになる。

今回の改訂で求められている「養護及び教育を一体的に行う」ことを展開するためには、教育の「意識性や方向性をもって子どもを育てる」ことも大切にしながら、保育の実際を評価し改善を続けることにすると筆者は考える。

1・2歳の乳児だから養護だけが必要で、教育の視点が不要というわけではない。反対に3・4・5歳児は教育だけで、養護の視点が不要というわけではない。例えば1・2歳で保育者に手を拭いてもらう行為においては「清潔を保ち子どもの不快感を解消する」ことは養護であり、「子どもに『きれいになったね』と共感の言葉を投げかけ感情の意味理解を促進する」ことは教育につながる。同様に、3・4・5歳では「外遊びから帰った後に、自分で気持ちよく感じるため手を洗う」ことは養護になり、「外遊びから帰ると、手を洗うという見通しを持った行動に導く」ことが教育になる。

つまり、養護と教育を一体的に行うためには、子どもの主体性や意図を保育者が理解し、そこに子どもの学びがどのように存在しているかを見抜く必要がある。乳児の場合は、自分の思いを言葉で伝えることが困難であり、幼児の中にもうまく気持ちを伝えることができない子どもが存在する。保育者は、漠然と子どもを観察していると貴重な子どもの成長サインをみのがしてしまう。それ故、意識的に視点を決めて、子どもを観察し理解しなければいけない。

#### V. 指導計画の作成

##### (1) 指導計画作成の手順と留意点

指導計画作成の留意点を以下に、5点述べる。

①指導計画はその保育所の全体計画なので、職員（園長、主任、保育士、看護師、栄養士、調理員など）すべて

が参加して検討をする。園の生活は、担任だけでなく他の職員との関わりも多く、それぞれの関係の中で子どもは成長している。保育指針に示すように、保育の目標が達成される全体的「保育計画」と具体的な「指導計画」を作成し、保育の原理・目標・方法・環境について押さえることは重要である。

- ②指導計画は個々の園の実情に応じたものを作成する。園の実態、環境、規模、園舎の状況、施設・設備の状況、クラス編成、保育者の経験年数や性別等の構成なども確認する。また園の存在する地域の自然環境、社会環境、活用できる社会施設、近隣の小中学校も調査する。これは地域に根付いた保育所であるための基本的な姿勢である。
- ③一人ひとりの子どもの実態を把握し理解する。個々の子どもに、今こそ必要な体験を重視した保育を展開するには、子どもの現状を把握することが不可欠である。
- ④各園の実情や子どもの実態に応じて、育成したい子ども像や願いを明確にする。そしてその目標を具体化していくことである。保育目標が設定されたら、それが達成できるような長期の全体的指導計画と短期の具体的な指導計画を作成することになる。このような全体計画を作成後、観察や記録を通して評価し、フィードバックして次年度の指導計画に反映する。
- ⑤保育所は1年間の保育日数は300日以上にもなり、1日の保育時間は8時間以上に及ぶ。長い在園時間を考慮した指導計画を立てるには、長期的視点で保育を考えるとともに、子どもが心身ともにゆとりをもって無理なく自然な生活が営めるように配慮する必要がある。年齢も0歳から5歳までと多様なので、1年を4期や5期に分けて全体計画を立てることが多い。

先述の公立S保育所は1年間を下記のように4期に分けている

第1期（4・5月）・・・・・・新しい環境の中で出会い親しみの時期

第2期（6・7・8月）・・・生活や遊びがまとまり開放的になっていく時期

第3期（9・10・11・12月）・・・生活や活動を楽しみ充実する時期

第4期（1・2・3月）・・・振り返りや進級の楽しみをもつ時期

この時期は、子どもの成長や発達がめざましいので、在所期間全体を通しての発達、園生活への適応、保育者や友達との関係性の構築などについて、長期的な視野で見通して、その変化を把握しなければならない。園は原則的には集団生活を送る空間ではあるが、子ども一人ひとりが自己の可能性や楽しみを発揮する場でもある。これらが両立できる指導計画を立てなければいけない。

以上5点に渡り、指導計画作成の留意点と手順について述べた。先ほど紹介した公立S保育所では、指導計画以外にさらに年齢別及び月別の職員共通確認事項の一覧表が作成されている。0歳児から5歳児までに渡り年齢ごとに、食事、排泄、清潔、着脱、敷布、鞆、汚れ物、絵本、保護者への伝達などの一覧表を作成しているので紹介する。

【図1】平成28年度5月末作成（0・1・2歳児対象）★松田が一部改変

	0歳児	1歳児	2歳児
食 事	乳児食は10:50スタート	前半10:50配膳 後半11:10配膳	前半11:00配膳 後半11:10配膳
	4か月～6か月 膝を抱いてもらい食べる	配膳は大人がする	→
	7か月～8か月 手づかみで食べる	★自分でエプロンをつけはさそうとする	
	▲遊びでの手づかみは介助する	★食器はそのまま置いておく	→
	▲自分の口に運べたら一定量を取り食べさせる	★エプロン拭きは保育所と一緒に片づける	
	9か月 ★椅子に座って食べる	★食事前は手を洗う★正しい姿勢で食べる★食器に手を添える	
排 泄	▲取り皿・介助スプーンで一口に取り分ける	★スプーンを上手に持ち食べる	★個々の発達に合わせ手持ちに切り替える
	▲エプロンに着いたこぼれは洗わずはらう	▲取り皿・介助スプーンで一口に取り分ける	
	▲1歳児前後にコップとタオルを用意させる	▲自分に合った一定量を知らせ、押し込まない	→
		★自分で口を拭いた後に、大人が拭き上げる	
	★個人差に応じお座りができるようになったらおまるに座る	★基本は紙パンツ（パンツの移行は塗りやせず基本はクラスで行う）	★個々に合わせパンツ移行
		★トイレペーパーは大人が介助する	★移行後はパンツやズボンを全部脱がずに排泄
清 潔		★排泄後は大人と一緒に水を流す	★個々の時間に合わせうながしの声掛けをする
			★トイレってペーパーをちぎり自分で拭く
			★排泄後は大人が促し水を流す（後半）
	★排尿後も排便後も接見で手を洗う★排泄後、自分で衣服を整える（自分でできない場合は大人が手伝う）★食べ終わると椅子を入れる		
	★一歳頃より手洗いを始める	★入室時に石鹸で手洗いをする	→
	★牛乳の後、食事の後はお茶を飲む		★朝の牛乳後や食後、おやつ後は自分のコップでブク
着 脱	★午睡の後は、顔を拭いてもらう		ブクうがいをする。後半は入室後もうがいをする
	★鼻汁はこまめに拭いてもらう	★朝の牛乳の後はタオルで口を拭く	★鼻汁がたら、自分で拭こうとする
	▲汚れたらきれいにすると気持ちが良い感覚を身に付ける	★タオルを外して手で拭く	
	★年間を通して1日1回は着替える・入室時も着替える（シャワー時期はすべて、シャワー時期以外はパンツは着替えない）		
	★雨の日で外で遊ぶなくても、体の視診をかねて着替える。（3歳以上は雨の日は着替えない）		
	▲歩行がしっかりすれば調整かけてパンツ型おむつに着替えさせてもらう	★保育者と一緒に着脱し、脱いだものをたたむ	→
敷 物	▲衣服調整の時に、大人がたたむ姿を見せる		★靴・靴下は自分ではく
	▲大人に服を整えてもらう	（できることは少しずつ自分でしようとする）	★Tシャツをズボンに入れる
	保護者管理、毎週上下とも持ち帰り	保護者管理で基本的に隔週で上下交互に持ち帰る（シャワー期間中は上下とも持ち帰り）	
	靴は特記に規定なし	→	▲2歳児中に自分で持てる靴を用意する
	▲おむつ+おしっこ失敗とそれ以外を分ける	→	▲汚れものは基本2つに分ける。まとめてもいいようになれば1つにする（3歳児以降は1つ）
	▲口拭き・エプロン・顔拭きは別に入れる		▲失敗したら洗いやり、汚れ物に入れる

全体の保育計画ができたなら、次に保育内容で最も重視したい事柄は何であるかを、明確にしなければいけない。これは保育者が園の環境を生かした保育、季節感のある保育、子どもの生活リズムを大切にしたい保育などを考えることである。特に乳児は各家庭の生活に影響を受け、発達の違いが大きいので、一人ひとりにあった具体的な重点計画を作成する必要がある。

## (2) 長期の指導計画づくり

指導計画には一定の見通しを持った長期のものと、それを実際に機能させるために週や及び日に区切って計画を作成する短期のものがある。長期の指導計画には、子どもの入園から卒園までの生活を通しての育ちを描く。さらにその中を、年、期、月などに園の子どもの実態に合わせて分けていく。そして、子どもの発達の見通し、保育計画のねらいや内容の配列などを、地域や自然環境も加味しながら作り上げていく。公立S保育所の5歳児の長期の指導計画を、下記に提示する(図2)。

【図2】 5歳児の長期指導計画★松田が一部簡略化

保 育 所 目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心も体も元気な子ども</li> <li>・自分でできることは進んで取り組もうとする子ども</li> <li>・自分の気持ちを素直に表現できる子ども</li> <li>・色々なことに興味を持ち挑戦して遊べる子ども</li> <li>・相手の気持ちを考えて、仲良く遊ぼうとする子ども</li> </ul>		ク ラ ス 目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちと生活を楽しみ、色々な遊びを活発に行う</li> <li>・基本的生活習慣を身に付け、自制心を持とうとする</li> <li>・身近な自然や社会に関心を持ち、好奇心を高める</li> <li>・様々な表現を楽しみ、自分の素直な気持ちを出す</li> <li>・あるがままの自分を受け止めて、自己を振り返る</li> </ul>
期	1期(4・5月)	2期(6・7・8月)	3期(9・10・11・12月)	4期(1・2・3月)
ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> <li>○年長児の自覚を持ち生活に必要な決まりを守る</li> <li>○事前に触れて遊び好奇心を持つ</li> <li>○受容し安心感ある信頼関係をつくり</li> <li>○快適な生活をするようにする</li> <li>○外に多く出かけ、春の動植物に触れる機会を持つ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○夏の遊びを友達と工夫しながら楽しみ、気持ちを開放する</li> <li>○遊びの中で自分の目標を持つ</li> <li>○年少児への思いやりの気持ちが育つ</li> <li>○よい関わりを設定する</li> <li>○衛生管理に気を付け、快適な生活を送れるように環境整備をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○集団遊びのルールを理解し楽しさを味わい、共通の目的をもって協力する達成感を味わう</li> <li>○季節の変化に気を付け休息を十分取り健康に生活する</li> <li>○友達との協力で満足感をもたせ次の意欲につなぐ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○友達存在を認めながら協力して役割を進んで行い、協力して遊び充実感を持つように取り組む</li> <li>○こども個々の成長を認める声をかけ、何事にも自信を持つようにする</li> <li>○就学への期待をもって、集団として最後の保育所生活を楽しむ</li> </ul>
健 康 生 活 遊 び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活に必要な手順を理解し、進んで行おうとする(朝の準備帰りの用意、歯磨きなど) → 身の回りの整理を自分でできる</li> <li>・見通しをもって自分で判断し、排泄ができる(後始末、手洗い、スリッパの交換など) → 自分のハンカチで手を拭く</li> <li>・食事のマナーを守り楽しく食事をする(準備・片付け・食べ残しの始末・時間内に食べられる) → 給食のマナーを身につける</li> <li>・安全や危険なことが判断できて、気を付けて行動する(遊具の使い方、交通ルール。水の危険性など、冬場の風邪予防など) →</li> <li>・健康に気を付けて自分で衣服の着脱を行い、体温調節をする → 服や靴下は自分で管理する</li> <li>・当番活動話し合い、自分から進んで世話をする(生き物の世話、給食の準備片付け、植物の世話、日直など) →</li> <li>・生活や遊びの中で話し合い活動を取り入れて、友達の意見に耳を傾ける → 大人の援助により合意形成しようとする</li> <li>・自分より小さな年齢の子どものお世話やお手伝いしていくようにする → 異学年での交流の楽しさを味わう</li> <li>・身近な自然や社会に関心を持ち、調べたり試したりしようとする → 春の訪れと、小学校への期待</li> </ul>			

共通の配慮	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活の見通しが持てるように、一日のスケジュールを黒板等に表示し、毎朝こどもとともに確認をする</li> <li>・椅子に座って一定時間、友達や大人の話を聞く機会を、生活や遊びの中に取り入れる</li> <li>・5歳の発達に応じて子どもに任せるべきことと、子どもが意識して考えたりする間をとるなどきつかけづくりの援助を工夫する</li> <li>・子どもがやろうとする気持ちを認め、意欲的に生活が送れるようにするために、子どもが選択できる環境や、試することができる時間を保証する</li> <li>・子どもを認め励ます言葉がけは、具体的に何をほめられているかが分かるようにする</li> <li>・遊びや生活の中に子ども同士が話し合う活動を取り入れて、聞き合う態度を養うとともに、大人が間に立ち援助し、合意形成に導く</li> <li>・就学前に向けて、生活や遊びの中に数・量・文字などをとりいれて、興味や関心を高める</li> </ul>
-------	--

### (3) 短期の指導計画づくり

長期の指導計画と関連付け、より子どもの実態に即し、週・日などを単位とした生活を記すのが短期の指導計画である。これで最も重要なことは子どもの実態を理解することである。一人ひとりの子どもや集団の課題や活動目的を見出し、子どもの活動を予想して支援を考える。子どもの姿をイメージしながら短期の指導案を作成するが、実際の子どもの保育者の予想どおりには動かない。観察や記録の評価等を行い、次週や翌日の指導へフィードバックする連続性が、保育の質の向上につながる。

S 保育所の 6 月中旬の週案を下記に例示する。より具体的な子どもの生活の様子が目に浮かぶような記述である。さらに 5 歳児が対象なので、就学前までに育てたい 10 の視点も援助に記載した。(図 3)

(図 3) 5 歳児 ライオン組 週の指導計画 (6 月 18 日～6 月 22 日) ★松田が一部改変

ね ら い 内 容	<ul style="list-style-type: none"> <li>○遊びの中で自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりして、方法を考えて遊びを進める</li> <li>○のびのびとからだを動かして遊ぶことを楽しむ(竹馬・鉄棒・木登り・プール遊び)</li> <li>○身近な自然の変化に気づき、友達と喜んで見たり、触れたりする(夏野菜の生長、ウサギ、金魚、ざりがに)</li> <li>○メンズデーにお父さんたちと一緒に親しみをもってかわる。</li> <li>○雨が続き、蒸し暑く熱中症の危険があるので、水分補給と手洗いの励行する</li> </ul>					
先 週 の 子 ど も の 姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しみにしていたジャガイモ掘り。大きな順に並べたり数えたりして楽しんでいる姿が見られた、調理してもらい、4 歳児と一緒に食べるのを楽しみにしていた。中には土を触ることに抵抗があり、掘れない子もいた。</li> <li>・図書館に本を返却に行く。その道中の川のアユが大きくなっていた。魚道の話も覚えていて、「アユが上がるのを見たい」を絵本と体験をつないでいた。国道の高架下の電球にクモの巣があるのを前回に見つけたが、それに小虫が沢山絡まっていた。H が「この虫をクモが食べる」というと、N が「ええつ、食べられる!」と驚いた。クモが虫を食べることを知識として知る子どもは多いが、実際に見ることで納得をしていた。</li> <li>・キンカンの木で見つけた青虫のさなぎが黒くなり、角のような突起が出ている。Y はさなぎがアゲハの黄緑色と違うことに気づき「死んでい るのかな」「角がある」と不思議がっていた。</li> </ul>					
行 事	18 日 (月)	19 日 (火)	20 日 (水)	21 日 (木)	22 日 (金)	23 日 (土)
	引き渡し訓練	仲良しタイム	メンズデー			プール開き
◆ 予	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆好きな遊びをする(鉄棒・砂場・リレー・巧技台・木登り・鬼ごっこ・虫研究所・ウサギの世話)</li> <li>★竹馬に挑戦する気持ちを認めて励まし、その様子をクラスの子どもに紹介する(1・2・3・8・9)</li> </ul>					

想 さ れ る 子 ど も の 活 動 ★ 援 助	★泥遊びで泥のねっとりした感触や水の気持ちよさに共感し、友達と一緒に作成する姿を認めていく（１・３）
	★見つけたことや感じたことを言葉で伝えようとしていることを受け止め、クラスで話題にして交流していく（７・９・１０）
	◆クラスの友達と遊ぶ（律動、歌をうたう、絵本を読む、笹飾りを作る、遊ぶ方法の話し合いをする）
	★広い場所で律動がして、一人ひとりが気持ちよく体を動かす快感を味わえるように進める（１）
	★落ち着いた雰囲気絵本の読み聞かせが聞けるように、Ｓを膝に抱き寄せて、表紙をゆっくりと見る（４・１０）
	★七夕の話をして、夜空に思いを広げて制作を楽しむ（７・８・１０）
	◆メンスデーでお父さんたちと運動遊びをする      ★親しみを持てるように名前を覚える機会をつくる（１・５）
	◆身近な自然に気づき触れる（イチゴの苗のかたづけ、夏野菜の収穫、園内外の生き物に触れる、雨の音や梅雨を実感）
	★イチゴに感謝の気持ちを持つとともに、いちごの葉やランナーに触れて遊ぶ（６・７・９）
	★気付きを大切に受け止めて、クラスで交流する機会を設定するとともに、夏野菜の収穫と一緒に楽しむ（７・８・９・１０）
★ 援 助	◆運動遊びをする（ラダー、マット、鉄棒、跳箱、縄跳び）
	★挑戦しようとする気持ちを認め、小さな変化を見逃さず褒める（１）
	★友人の頑張りに気づいたり、友達の活動に刺激を受けたりして、再度挑戦できる場を設定する（１・６）
◆引き渡し訓練      ★災害場面を想定し、命を守るために、自分で考えて一次避難ができるように訓練する（１・２・４）	
就学前までに育てた	(１) 健康な心とからだ      (２) 自立心      (３) 協同性      (４) 道徳性・規範意識の芽生え
い１０の項目	(５) 社会生活とのかかわり      (６) 思考力の芽生え      (７) 自然とのかかわり・生命尊重
★援助に記入	(８) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚      (９) 言葉による伝え合い      (１０) 豊かな感性と表現

## Ⅵ. まとめ

指導計画とその評価は表裏一体の関係である。長期の指導計画に基づいて、短期の指導計画を作成し、毎日の保育を実施することが重要である。実施状況を様々な視点で振り返り、子どもの変容を把握し、それが保護者や地域にどのような影響を与えているか、反対に何がうまく実践されなかったかを評価する必要がある。そして改善方を検討して、次年度の年間指導計画等を作成することが、指導計画と評価の一体化である。指導計画を作成し実施し自己評価することはもちろん、外部評価も参考にして、総合的に評価と改善を繰り返すことにより、保育所の指導計画はさらに良いものになると期待する。

## 文献 (References)

- ・北野幸子『教育課程論』２０１１ 北大路書房
- ・宮川真寿美、野津直樹、内山恵美子 『保育の計画と評価』２０１８ 萌文書林